

## ミミ塚古墳は一石二鳥 [伊吹町]

ここでは10号に引き続いて、伊吹町上野で発掘調査され、伊吹山文化資料館に移築復元した「ミミ塚古墳」の意外な一面についてご紹介しましょう。

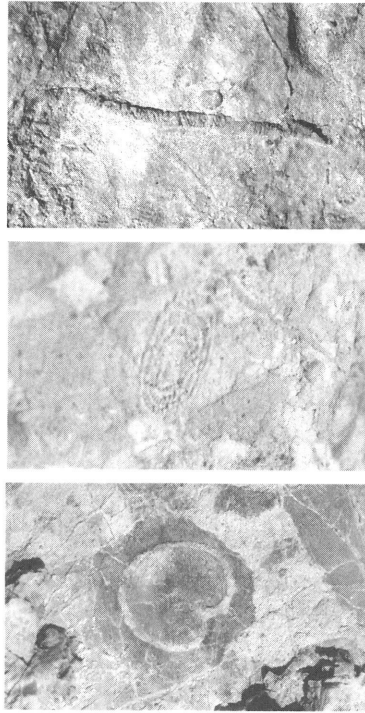
古墳の石室を構成する石材は、地元伊吹山の石灰岩で100点以上を数えます。山東町で調査された高岡塚古墳も、同じように石灰岩が使われており、伊吹山麓に分布する後期古墳には、比較的手に入りやすい石材として利用されているものと思われます。復元された石室は石灰岩のため白く美しく、背後の森の緑とのコントラストが良くあいます。

さて、ここから今回の本題に入るわけですが、見学にこられましたら、それぞれの石の表面をじっくり観察してみてください。小さな粒々や梯子状の模様、渦を巻いたような線が表面にたくさん見られます。これらは、2億5千万年前に赤道付近の海底に生きていた生物フズリナ・ウミユリ・巻貝などの化石です。伊吹山は、海底火山の爆発により隆起しながら、長い年月をかけて現在地

まで移動してできた山です。山頂から山麓まで、石灰岩の中には初期アンモナイトやウニ・ベレロフォンなどの化石を見ることができます。

ミミ塚古墳復元は、歴史学習だけでなく自然科学の面でも、子どもたちの体験学習の場になるという思わぬ効果をもたらしてくれました。

(高橋順之)



▲化石(上から、ウミユリ・フズリナ・巻き貝)

## 情報BOX

◆伊吹町教育委員会では下記の図書を近日刊行します。

『上平寺城跡遺跡群分布調査概報Ⅱ 高殿地区』  
(伊吹町文化財調査報告書第13集)

\*北近江守護京極氏の家臣団屋敷群の測量調査の概要を掲載。あわせて、戦国期京極氏家臣団を考察。

『伊吹山文化資料館年報2』(平成11年度)

\*弥高寺跡周辺の遺跡の論考も掲載しています。

『伊吹山の植物と伊吹葉草園』

\*伊吹山の植物を写真で紹介しています。

800円

◎問い合わせ先

伊吹町教育委員会 生涯学習課

☎0749(58)-1121(代)

◆米原町教育委員会では、町指定史跡、鎌刃城跡のパンフレットを作成しました。

◎問い合わせ先

米原町教育委員会 社会教育課

☎0749(52)-1551

## ◆◆編集後記◆◆

お待たせいたしました『佐加太』11号をお届けします▲今回は米原町にある鎌刃城跡が表紙を飾りました。最近樹形虎口も復元され、近江を代表する山城として注目を集めています。▲地元区民の手で調査や整備、啓発など活発な活動もおこなわれています。町の史跡にも指定されました▲今後の継続的な調査で中世山城の姿が明らかになることでしょう▲一方、伊吹町の上平寺城跡では家臣団屋敷が集中する地区の測量調査を終了しました。今後の基礎資料となるものです▲城下町部分では開発に伴うものとはいえ発掘調査が進められています▲いままでも山間に守られてきた遺跡が変わりつつあります▲編集後記にかえて、中世城館跡の話題を2つ紹介しました。(の)

坂田郡文化財ニュース

佐加太 第11号

発行 平成12年3月31日

編集 坂田郡社会教育研究会文化財部会

事務局 〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照37

伊吹町教育委員会生涯学習課

TEL.0749(58)1121

印刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第11号

2000年3月31日

滋賀県坂田郡社会教育研究会  
文化財部会

## 鎌刃城跡第2次調査の成果 [米原町]

米原町番場に所在する戦国時代の山城、鎌刃城跡の発掘調査も今年は2年目を迎えました。

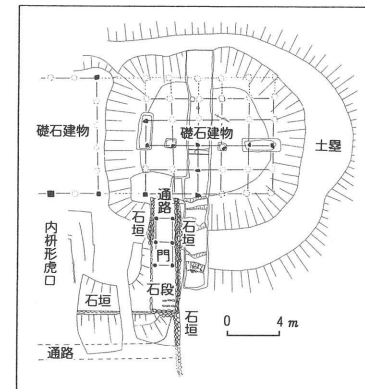
今年度の調査は、昨年調査で城跡北端の土塁囲いの曲輪で、土塁を断ち割る形で一部露頭していた石垣が、どのような構造であったのかを確認する目的で実施しました。

その結果、土塁囲いの曲輪へ出入りするための通路を検出することができました。この通路の構造は、土塁を断ち割って開口しており幅は1.3m(四尺)を測ります。通路の両側は石垣で構築されており、石垣の残存高は最も残りのよい所で約1.5mほどですが、両側の土塁の残存状況より築城当時には3~4mの高石垣であったと考えられます。

通路の中央からは6個の礎石が検出できました。通路は土塁囲いの曲輪への出入り口ですが、この曲輪からは昨年の調査で五間×五間の半地下式構造の総柱建物が検出されており、通路は城外より建物の地階へ出入りする目的で構築されたものと考えられます。中央で検出された礎石は通路の上に懸けられた多聞櫓の櫓門の門柱礎石と推定されます。

通路は城外側で高さ約2mの垂直の石垣となっておりとても通行できません。おそらく木梯子か木の階段が架けられていたものと思われます。

なお、検出された石垣はすべて天端が



調査区概念図

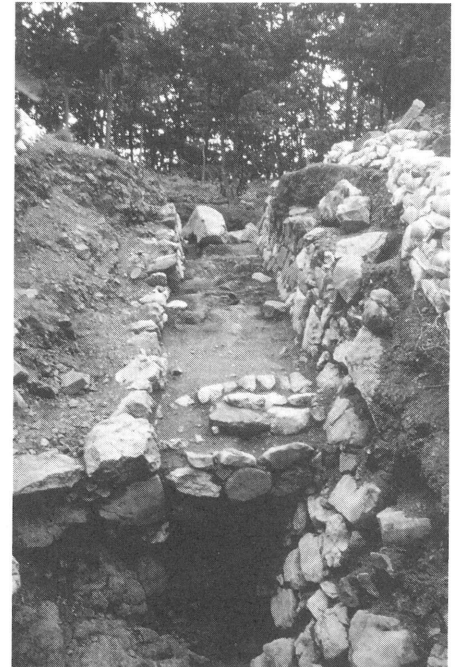
崩されていました。これは自然に崩れたものではなく、破城(城割り)によるものと考えられます。

今回の調査では、土師器皿、白磁端反皿(中国製)、青磁後花皿(中国製)、瀬戸美濃天目茶碗、瀬戸美濃皿、瀬戸美濃挿鉢、備前大甕など、16世紀前~後半の遺物が出土しています。また、昨年同様鉄釘が大量に出土しており、通路には相当立派な建物が建てられていたことがわかりました。なお、特殊なものとして、海産の貝殻が出土しています。食用または儀式に用いられたものとして注目できます。

昨年度、今年度の調査で鎌刃城跡は戦国時代の山城であるにも関わらず、大部分が石垣で構築されていることが明らかとなりました。

また、建物も簡単なものではなく、後の近世城郭につながるような施設であったことも明らかとなりました。

来年度も調査は続きます。乞うご期待。  
(中井均)



発掘調査で現れた通路



## 坂田郡の遺跡案内 中世城館跡編—その1—

滋賀県教育委員会が実施した分布調査によって、県内には約1,300にのぼる中世城館遺跡が存在することが確認されました。特に坂田郡は美濃との国境であるとともに、江南の六角氏と江北の京極氏、浅井氏の国境にもなっており、戦国時代には数多くの山城が築られました。

米原町の鎌刃城、太尾山城、富蒲嶽城は彦根市の佐和山城とともに東山道（中山道）を監視する目的で築かれた「境目の城」です。いずれも山頂部に曲輪、土塁、空堀を設け、現在でも450年前の姿をほぼ残しています。このうち鎌刃城跡については発掘調査が実施されており、石垣や枳形虎口などが検出されており、近江の築城技術の先進性が改めて確認されました。一方美濃との国境に目を向けると元亀元年（1570）、岐阜から近江に侵攻を開始した織田信長に対して浅井長政は江濃国境に「たけくらべ」「かりやす」に要害を構えて迎え撃つ体制を整えました。これが山東町の長比城跡と、伊吹町の上平寺城跡です。峻険な山頂に構えられた山城で、巨大な土塁や堅堀で構築されており、国境の城の姿をよく伝えています。

（中井均）

## 神の宿る音色・土鈴

〔伊吹町〕

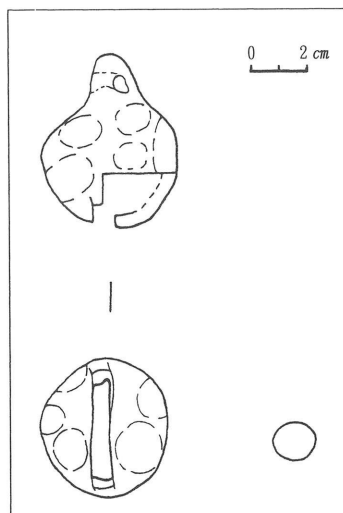
図は、平成9年に上平寺城下町遺跡から出土した土製の鈴（土鈴）です。直径約2.5cm、鋭利な刃物で鈴の口が長細く切られ、結びつけるためのつまみに穴が空けられています。中にはしっかり玉が入っていて「カラカラ」という音がします。

上平寺城下町遺跡は、16世紀前半に京極氏が築いた上平寺館に伴うもので、この時期の北近江の守護館が、いまの伊吹町大字上平寺にありました。（1・5～7号参照）。土鈴が出土したのは、外堀跡から三段南の水田中で、上平寺城の絵図では「市店民屋」と記載された区画にあたります。発掘調査では、掘立柱建物や石組井戸が検出され、その一角の直径30cmの柱穴から見つかりました。

土鈴の歴史は縄文時代までさかのぼるといわれています。古代社会において、カミに村の安泰や農作物の豊穡を願い感謝する“カミマツリ”は、重要な祭祀でした。地下世界に住むカミをこの世に招くための道具として銅鐸があります。また、神殿や自然の岩屋もカミが宿る場

であり、井戸や便所にもカミがいます。これらはいずれも内部が空洞で、この中空空間を通じてカミがこの世にあらわれ、そこに宿ると考えられたようです。中が空洞の鈴も小さいながらカミを招く道具として使われました。「鈴生り」は、まさに豊穡を願う言葉で、ワラにたくさんの鈴を付けたようすをあらわします。鈴の音が鳴るは、作物が良く成るにつながります。上平寺の土鈴も、このような信仰の道具だと思われま

（高橋順之）



土鈴実測図（右は中の玉）

## 美しい文化

〔山東町〕

今回は埋蔵文化財を少し離れ、町のPRを少々。

昨年秋の文化財保護審議会によって、山東町内の2件の文化財が各々登録有形文化財、国史跡に答申されました。

登録有形文化財（登録文化財）に答申後、3月2日に登録されたのは、柏原宿歴史館の主屋・展示館・収蔵庫・門の4件です。この歴史館は、旧中山道柏原宿の街道沿いにあります。中でも主屋は木造2階建てで大正6年（1917）に建てられた立ちの高い近代的な建物で、街道に向けて入り母屋造りの妻飾りを三つ重ねる重厚な表構えが特徴的です。平成10年4月からは柏原宿をメインテーマとした心やすらぐ柏原宿歴史館として活用しています。皆様のお越しをお待ちしています。

さて、一方国史跡に答申されたのは、清滝にあります清滝寺京極家墓所です。京極家は近江源氏佐々木氏の流れを汲み、バサラ大名で著名な道誉、関ヶ原合戦で活躍した高次・高知などを輩出した名族で、清滝寺はその菩

提寺として、中世から近世にかけての石塔が整然と配されています。

当墓所は昭和7年に一部が国史跡に指定されており、今回の追加指定によって全域が国史跡となりました。

（桂田峰男）



柏原宿歴史館

## 高溝遺跡の儀鏡と出土遺構

〔近江町〕

琵琶湖北東部を西流する一級河川天野川は、河口より上流4kmの付近から分水され、右岸の沖積低地上に無数の水路を生み出しました。これらの水路を巧みに利用しながら、縄文時代早期以降、弥生時代、古墳時代には多くの集落遺跡が生み出されました。

高溝遺跡もその一つです。この遺跡は、縄文時代前期・中期・後期・晩期と、弥生時代中・後期、古墳時代前期に存在した大規模な集落遺跡です。

天野川から分水された流路は、各時代の集落経営の中で、生活水利として大変貴重な存在でした。

一般に、環濠集落遺跡では、古墳時代の初頭期に濠の埋め戻し行為が確認されますが、この高溝遺跡では、むしろ大形のものに水路が拡張されています。

これらの水路は、後の平安時代後期までに普及し終えた「条里制地割」の形成によって埋設されますが、それまでの間、集落内の水利として重要な役割を担っていました。

条里制地割の施工によって埋め戻された水路跡からは、縄文時代の遺物と、古墳時代前期の遺物が多数発見されています。

中でも古墳時代前期の遺物は、大変特徴的で、丹塗りの土器、小型の土器、モモの種子、木製形代、銅鏃、そ

して「小形儀鏡」と呼ばれる小振りな銅製鏡で構成されています。

背後に日無山を控えたこの水路は、古墳時代前期に祭祀的な意味合いをもっていたようです。

出土した小形儀鏡は、2面あり、いずれも水中に長く置かれたせいか、表面は磨耗しています。

1点目は「重圏文鏡」、直径2.4～3.8cm・厚さ2mmを測り、二重の圏線を巡らせます。また2点目は「素文鏡」と呼ばれ、直径3.4～3.8cm・厚さ2mmを測ります。重圏文鏡の方は、首から下げていたのでしょうか、一部に穴が穿たれています。

後の平安時代に展開された条里制によって大規模な広がりを示す集落遺跡としても知られています。

（宮崎幹也）



高溝遺跡から出土した儀鏡（重圏文鏡）